

# CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.101 January, 2009

## 目次

中国、沖縄ドキュメンタリー／アートの可能性 特別研究員 山上 亜紀 ..... 1-2	大学に行こうとする社会、行こうとしない社会 東アジアの中での比較から 特別研究員 相澤 真一 ..... 8-9
『四海我家』と『私の紅衛兵時代』について 特別研究員 重野 純子 ..... 2-4	客員研究員によるCAPS 拡大研究会 Why Japan? モハメド5世大学教授(モロッコ) モハメド・アアフィーフ氏 ..... 10
「ロマン主義研究」日・英・独の比較研究プロジェクトの紹介 法学部教授 山田 崇人 ..... 4-6	アアフィーフ教授研究会報告 文学部教授 堀内 正樹 ..... 11
本を読む <i>A String Untouched: Dag Hammarskjold's life in haiku and photographs</i> by Kai Falkman 経済学部教授 近藤 正 ..... 7	研究活動報告 CAPS 事務局 ..... 12

### 中国、沖縄ドキュメンタリー／アートの可能性

特別研究員 山上 亜紀

中国のドキュメンタリー映画の歴史は浅く、ほんの20年ほど前までは、国家が統制するメディアとは異なるドキュメンタリー映画はごく少数だったといえます。その中国ドキュメンタリー業界を先導してきた呉文光(ウー・ウェンガン)監督の代表作である『四海我家』(1995)と『私の紅衛兵時代』(1993)を2008年10月28日から30日まで上映し、最終日の31日には呉監督をお招きして講演会を開きました。

『現代思想』編集長である池上善彦さんの司会のもとに進行した講演会には、学生だけでなく一般の方々の参加も目立ち、会場はあふれんばかりの盛況ぶりでした。講演会は3部構成になっており、第一部では呉監督がご自身のドキュメンタリー映像に対する考え方などをお話してくださりました。

呉監督は、中国の映像に対する国内外の認識の変化を、「地下」から「独立」そして「個人」へ、という流れで捉えています。1990年代、西欧の人々は中国の映像を「地下映画」と表現していました。



< 呉文光監督と仲里効氏の講演後に行われた、参加者との意見交換および質疑応答の様子 >

その概念の根底には、中国政府の抑圧下、あるいは支配下にある映像、というイメージがあります。そこには、西欧諸国の人々の中国に対するイデオロギーが反映されているといえます。しかし、90年代後半からは国家の統制下にある映像とは異なる独立記録(インディペンデント・ドキュメンタリー)映画が徐々に作成され、西欧はその現象を

種の「運動」と見なしました。呉監督は、「運動」という言葉に西欧の中国に対する偏見が見えるとし、集団活動を前提とした「運動」ではなく、「個人」という概念を用いることを提案します。ドキュメンタリーに必要とされるのは個人の声であり、個々人の多様さだからです。呉監督にとって、ドキュメンタリーとは自由と独立の象徴であり、個を表現する最たる媒体なのでしょう。

第二部では、沖縄を中心に多彩な活動を展開されている仲里効さんが、映像を交えながら東アジアの周縁としての沖縄について語ってくださりました。仲里さんも関わっている「琉球弧を記録する会」では、戦争体験者の琉球方言による語りをメインとした映像を製作しています。琉球語は、沖縄における標準語の普及過程で使用を制限され、衰退したという歴史を持ちます。その歴史を踏まえたくて琉球語にこだわるのは、琉球語による語りや国家の力学の中で生きてきた沖縄を表象することに他ならないからです。そこには、言語をめぐる権力関係が顕著に現れており、ひいては、東アジアにおける沖縄のポジションにまでイメージを膨らませる源泉ともなるのです。

第三部では、池上善彦さんの司会進行のもと、講演者同士の意見交換や、一般参加者との質疑応答の時間を持ちました。いくつかの質疑応答の中でもっとも印象に残ったのは、個人の語りの中に浸透している公共性についての議論です。呉監督は、『私の紅衛兵時代』に登場する人々の語りに、中国国家が公に広めてきた政治思想の存在を認め、それを「公共性」と表現します。それに対して仲里さんは、個々人の語りの中に「個」と「公」が共存するところに、『私の紅衛兵時代』のすばらしさがあると指摘されました。

講演の最後に、音楽評論家の東琢磨さんが残した言葉に、私は映像の更なる可能性を見出しました。それは、「多様な文化に共通性を持たせる映像の特性と可能性」という言葉です。グローバル化が進み、様々な文化が交錯する現代社会において、映像は多様性を包含し、世界を根底で結びつける可能性を秘めているのではないのでしょうか。

## 『四海我家』と『私の紅衛兵時代』について

特別研究員 重野 純子

### 『四海我家』について



10月31日に行われた講演会に先立って上映された『四海我家』(1995年)、『私の紅衛兵時代』(1993年)を通して、私たちは中国ドキュメンタリーの先駆者である呉文光(ウー・ウェンガン)監督の作品に触れる機会を得た。作品もさることながら、鑑賞後の研究仲間との作品に関する意見交換においても考えさせられることが多々あり、今回の企画は「ドキュメンタリー」の持つ可能性について考えるきっかけを与えてくれたといえる。

『四海我家』の上映に際しては、その前作である『流浪北京：最後の夢想家たち』(1990年)のダイジェスト版もあわせて上映された。両作品の登場人物は5人の若い芸術家たちである。『流浪北京』では定住先も芸術家としての成功も上京先の北京で見出すことができずにいる彼らの様子が、『四海我家』ではその後の姿が描かれている。『四海我家』では前作で取り上げられた5人のうち、4人までもがフランス、イタリア、オーストリア、そしてアメリカへと生活と活動の場を移しており、北京には1人しか残っていなかったことは大きな驚きであった。

呉監督はこの作品の登場人物に対し、それぞれが創作活動への情熱を失っていないとコメントしていたが、海外に移った4人の姿を見る限り、果たして彼らに「情熱」が残っているのかとの疑問を持たざるを得なかった。彼らはなるほど創作活動をすっかり止めてしまったわけではなく、創作活動の試みを

細々と続けているのだが、『四海我家』で見た彼らから「情熱」というよりはその「くすぶり」ばかりが感じられたからである。唯一、北京に残り、演劇活動を続ける男性のみが充実した創作活動を実現したように見受けられた。

なぜ4人は海外に活動の場を求めたのか。作品中、海外生活から得るであろう「刺激」はすでに「日常」へと変化しており、彼らはそれぞれの活動場所において新たな「不自由」に苦悩しているかのようであった。活動の場を外に移しながらも前に進むことができず、日常生活の雑務に追われる彼らの姿に、彼らは果たして本当に追求すべき何かを持っているのか、と筆者は苛立ちを感じずにはいられなかった。この苛立ちの原因は、呉監督の作品にナレーションや説明がほとんどなく、私たちが呉監督とともに彼らがカメラの前でふと見せるしぐさや漏らした言葉、そしてしぐさなどを追ひ、そこから彼らの気持ちを拾うしかないことにも起因しているかもしれない。この手法については後述したい。

『流浪北京』そして『四海我家』に登場した5人については今後も呉監督がその姿を追っていくのだという。彼らは呉監督の再訪をどのように受け止め、どのような姿を提示するのだろうか。筆者が海外に移住した4人へ感じた苛立ちは、作品を見終わった後も澱のように心に残っている。その意味でも現在進行形のドキュメンタリーとも言うべきこれらの続編が楽しみである。

#### 『私の紅衛兵時代』について

『私の紅衛兵時代』の主な登場人物も5人である。この作品は、1964年から10年間、中国を激しいうねりに巻き込んだいわゆる「文化大革命」に遭遇した5人へのインタビューの断片を文脈に沿ってつなぎ合わせて成り立っている。インタビューが行われたのは1992年、作品は主にその26年前である1966年当時に5人が体験または目撃したことを回想する形で進む。この作品にもナレーションはなく、文化大革命なるものがいかなる経緯で起こり、進行し、そしてどのような影響を中国に与えたのかについては説明がほとんどない。

1966年当時、インタビューに応えた人物たちは15歳から19歳ほどの10代の若者であった。彼らについてはそれぞれの当時(1966年と1992年)の簡単なプロフィールが紹介されるのみで、その人物について詳しく知ることはできない。しかしこのことがかえって本作を面白くしているように筆者には思えた。

なかでも非常に興味深く、また異様に思えたのは、彼らが語る内容のみならず、語る際に見せた彼らの表情であった。反革命的であるとの嫌疑をかけられた人々が殴られ、住居を荒らされ、また監禁されたという当時の状況を語る時、無表情の者がいる一方で、笑顔を浮かべて当時を語る証言者もいた。語られる内容とそれを語る人物の浮かべる表情のギャップに見る者は違和感を得るが、これらに対する呉監督のコメントは見られない。そのため、鑑賞者は彼らに関する簡単なプロフィール、彼らの言葉や表情、しぐさ、または住居の様子を手がかりにこれらの人物と、その真意について推測することを求められる。各々の立場から当時を振り返る5人の証言の評価や位置づけは受け手であるわれわれに委ねられた形である。

呉監督の手法は、旧東ドイツのジャーナリズムについて研究してきた筆者に社会主義環境における表現活動に通じる何かを想起させた。旧東ドイツのジャーナリストは「頭の中のはさみ」を用いることで、当局からの追求と検閲を逃れる術を経験しながら習得し、一方の受け手である読者は「行間を読む」能力を養うことで記事の中から削除された何かを読み取ろうとした。こうした両者の交互関係により、旧東ドイツの市民は「真相」または「真実」のありかを探りあっていたのである。呉監督が作品中にその主観を述べないことは、当局による追求や検閲を逃れるためではないだろう。講演で呉監督自身が述べたように彼の表現活動は「独立」したものであるからである。しかし、主観を敢えて述べない呉監督の手法は、受け手であるわれわれに「行間」を探ることに似たプロセスをたどることを求めている点で旧東ドイツのジャーナリズムを想起させるものがあった。

また呉監督の手法は黒澤明の『羅生門』をも筆者

に思い出させた。『羅生門』では、作中に起こった事件について当事者や目撃者がそれぞれの立場からまったく異なった証言を行っており、最後まで事件の「真相」は芥川龍之介による原作の題名と同様「藪の中」にあり、それについて鑑賞者であるわれわれは憶測するしかないからだ。

しかし呉監督はわれわれを「藪の中」に置き去りにしたわけではない。作品中、呉監督は上に挙げたような言葉や表情、しぐさを逃さず記録し、証言者の生活環境を画面に取り込むことでわれわれにさまざまなヒントを与えているからである。これらのヒントが指し示す先にあるのは監督自身の考え、つまり主観であろう。最後まで呉監督は文化大革命が彼

らに及ぼした影響についてはっきりとしたコメントを作品中において表明することはない。しかし、その「革命」が当時多感な10代であった証言者たちの人生に暗い影を残し、そして現在の中国のありよりの一端に影響を与えているとの示唆が筆者には感じられた。

ドキュメンタリーにおける客観性または主観性のあり方については議論が多くある。「中国、沖縄ドキュメンタリー／アートの可能性」と題された本企画において筆者は、以上のように呉監督の作品における主観性に注目することとなった。そしてこのプロセスの中でドキュメンタリーの持つ可能性に対する新たな視点を得たことは大きな収穫であった。

#### 「ロマン主義研究」日・英・独の比較研究プロジェクトの紹介

法学部教授 山田 崇人

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される」といえば漱石の『草枕』の冒頭の言葉だとだれもがすぐに気づくことでしょう。もっとも、実際の出だしは「山路を登りながら、こう考えた」であり、その後上記の言葉が続きます。これを読むたびに、山路を登りながら随分と酔狂なことを考えるものだと思ったのですが、実際に自分で山路を登ってみると、意外とこの出だしが単なる枕詞だけのものでもないように思えてきたのでした。イギリス・ロマン派詩人ワーズワスが山歩きを好み、自然の中を散策しながら傑作詩を書いたことを考えるとなおさらです。

この夏私は当プロジェクトの一環として、イギリス・ロマン派詩人たちの聖地ともいべき湖水地方および、ワーズワスが有名な「ティンターン修道院から数マイル上流にて詠める詩」を書いた場所であるワイ河畔を訪れてきました。

湖水地方では、ワーズワスが傑作の多くを生み出した「偉大なる10年」と呼ばれる時期のほとんどを過ごしたグラスミアに滞在しましたが、その時に近くの山の上にあるEasedale Tarnへと散策に出かけました。これは当時ワーズワスがよく訪れた場所で、彼の『湖水案内』にも最も美しい小湖の1つとして紹介されています。それはグラスミアの村か



「悪魔の説教壇」からティンターン修道院を臨む

ら直線距離にして3キロ程度のところにあり、片道2時間ほどで歩いていくことができますが、標高300メートルくらいの丘の上にあるため、そこから流れ出した水がところどころ小さな滝をなして流れ落ちる溪流となっていて、白く泡だって流れ落ちる様子からそれはSourmilk Gillと呼ばれ、大変美しい景色を形作っています。



Sourmilk Gill

Easedale Tarnまではその流れに沿って登っていくため、途中から道はやや急勾配となります。そこを登っていた時に心に浮かんだのは、これまでにどれほどの人がこの道を歩いたのだろうかという思いでした。これが下り道になると、前方に開ける景色に目を奪われたり、あるいは逆に足下のおぼつかなさや気を取られて余計なことは考えなかつたりするものです。しかし上り坂を一步一步進んでいく時は、視野も目の前の道にもっぱら限られ、次第に思いは内面化していきます。どれほど昔から人はこの道を歩んだのだろうか、そしてどんなことを考えながら登ったのだろうかと思った時に浮かんできたのが、『草枕』の冒頭でした。『草枕』の第一章では、主人公の青年画家が自然の美しい風景の中を歩きながら芸術について考えを巡らせています。これが一種のロマン主義解釈になっているのです。

イギリス・ロマン主義といえば、特にその第一世代と呼ばれるワーズワスやコウルリッジは自然の美しさや、それが人間の精神に及ぼす作用について考え、人間精神の奥深さを歌った詩人たちでした。イ

ギリスには、特定の風景を称える、地誌詩ともいべき詩の伝統があります。また18世紀頃から、自然の風景のピクチャレスクな美しさを紹介する旅行記などがたくさん書かれるようになっていました。しかし地誌詩においては描かれる風景が政治的あるいは経済的に何らかの価値があるがゆえに取り上げられるのですが、ロマン主義に至ると、自然の美は自然の美ゆえに称えられます。さらにはその風景が内面化され、精神との相互作用に目が向けられて、瞑想的な深まりを持って、ロマン主義の最高傑作とされる詩に昇華していきます。このような見方が20世紀後半頃までのロマン主義解釈の中心でした。ところが80年代になってロマン主義研究にも新歴史主義批評の波が押し寄せ、ロマン主義が自然を賛美するのは、現実から目を背け、歴史意識を覆い隠そうとしているのだという批判がなされるようになり、ロマン主義を政治的に解釈しようとする動きが盛んになりました。しかしその後そのような流れに対する反動もあれば、またエコロジ的な観点からこれまであまり取り上げられなかった作品を評価しようとするような動きもあります。このように今なお次々と新たな視点からの研究がなされ再評価されているロマン主義を、ヨーロッパでの地域ごとの展開の違いを見るのに加え、日本における受容や展開とも比較することによって、新たな評価を試みようというのがこのプロジェクトの目的です。

前述の『草枕』では、主人公の青年画家が憂き世を離れて山路を登りながら「住みにくき世から、住みにくき煩いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画である」といった物思いにふけっていると、つまづいて転びそうになり、考えが中断されて周りの風景が目に入ってきます。そうすると突然ヒバリの声が聞こえてきて、ロマン派詩人のシェリーによるヒバリの詩を思い出し、天高く舞い一心に歌うヒバリのよう現世を超越した存在になりきれない詩人の憂いを思いつつも、自然の風景の中にいればひたすらうれしさに浸ってられるという、自然の力のすばらしさを称えています。このところは、ワーズワスが語った、自然の持つ人の心を癒す力に通ずるものがあり、ロ

マン主義の詩の特徴の一つを捉えたものと言えそうです。といっても『草枕』がロマン主義的な作品だというわけではなく、ワーズワスがそうしたように実際に山の中を歩いた体験をもとに語っているというよりは、イギリス文学に通暁していた漱石が、このような設定の中で巧みにそれを表現して見せたというところでしょう。声ばかりが聞こえて姿が見えないヒバリの描写も、シェリーの詩の中のヒバリの描写そのものとなっています。おもしろいのは、『草枕』の主人公がさらに考えを巡らせて、俗世を超越し現実から距離を置いて、心安らかにこの世界を観察しようと決心したところで雨が降り出し、現実を引き戻されてしまうことです。ロマン主義批評の変遷と重なっているように思えて興味深いところです。

その他に今回訪れた興味深いものは、ワーズワスが "Yew-Trees" という詩の中で称えているセイヨウイチイの木です。1本はLorton Valeにある樹齢1000年以上のもので、もう一つはBorrowdaleにあり、ワーズワスがfraternal Four of Borrowdaleと呼んだ樹齢2000年を超えるとされるものです（Lorton ValeもBorrowdaleも湖水地方の地名です）。



Borrowdale のイチイの木の巨大な幹

この詩は、ワーズワスの想像力がシェイクスピアやミルトンにも匹敵するものであることを示す例として、コウルリッジが『文学的自叙伝』の中に引用しているものです。この詩には、悠久の時を生きて

きたこれらの木の神々しいほどの姿が巧みに描かれています。このように特定の場所や事物に注目し、それらを不朽のものとするのは、たとえば国木田独歩が「武蔵野」において行なったものであり、そこにはワーズワスの詩が引用されていたりもします。そしてワーズワスが自伝的詩『序曲』において、人生にはその人間の精神の形成に重要な働きをした原体験とでもいえるいくつかの記憶があり、それが日常に疲れた我々の心を癒してくれるということ述べていますが、その考えも独歩に吸収され「忘れえぬ人々」の中に独特な形で展開されています。このように明治の頃からロマン主義は日本に紹介されていましたが、いわゆる日本のロマン主義は昭和に入って保田与重郎らを中心とする人々によって展開されていきます。



Pride of Lorton Vale と称えられたイチイの木

当研究プロジェクトのメンバーは、リーダーを務める西洋哲学の瀬戸氏、ドイツ・オーストリア文学の里村氏、イギリス文学の坂野氏、そしてドイツ文化の重野氏と私から成り、これまでイギリスおよびドイツにおけるロマン主義について、研究会を開いて話し合ってきていますが、今後さらに、自然環境においてはイギリスに近いとも言える日本において、ロマン主義がどのように受容され、あるいは独自の展開を遂げたかという視点を加えることで、理解を深めていきたいと思っています。

本を読む *A String Untouched: Dag Hammarskjöld's life in haiku and photographs* by Kai Falkman, Winchester, VA, USA: Red Moon Press, 2006

経済学部教授 近藤 正

スウェーデンの俳句紹介。この本に収めてある俳句の作者であるダグ・ハマーショルドは日本人に最も人気のあった国連事務総長だった。1959年8月から11月にかけて、彼は110句の俳句を書いた。それは、Uppsala; Summers; Far away; Hudson Valleyと題された4つのグループに分類されていた。ウプサラは彼の故郷。ハドソン渓谷は国連事務総長時代の別荘があったところ。それらの俳句は彼の死後2年経った1963年に出版された日記の中に発見された。そこから50句が選ばれてこの本にまとめられた。編著者のカイ・フォークマンは元駐日スウェーデン大使で現スウェーデン俳句協会会長。

彼の死後ベッドサイドのテーブルに Harold G. Henderson 著の *An Introduction to Haiku* (1958年刊) が残されていた。ハマーショルドが俳句を知ったのはこの本からだったらしい。ヘンダーソンは進駐軍の通訳として日本に来て、天皇の人間宣言の原稿を書いた人。後にコロンビア大学の教授となり、1968年にアメリカ俳句協会を設立した。その協会の事務所は国連ビル前の日本協会に置いてあった。

ハマーショルドは優れた写真家でもあった。この本には彼の撮った写真が41枚紹介されている。彼の場合イメージ言語としての俳句と写真は深いところで繋がっていた。

ハマーショルドは1905年7月29日スウェーデン生まれ。父は知事や首相を務めた。軍人や政治家を多く出した父の家系から彼は「国や人類のために自分を棄てて奉仕することこそ人生最高の喜びである」という信念を受け継いだ。一方学者や牧師を多く出した母方の家系からは「詩篇にあるとおり全ての人間は神の子として平等であり、神において自分の師と見なすべきである」という信念を受け継いだ。彼はウプサラで育ち、ウプサラ大学で経済学のPh.Dを取得した。

彼が1953年4月47歳で国連事務総長に任命された時、世界は冷戦の時代で、国連は中立国の非政党的な文民を求めている。1955年彼は北京での仕事を成功させた。朝鮮戦争で射ち落とされた米軍のパイロットが中国に収監されていた。彼らを解放した手腕は「北京公式」とか「静かな外交」と賞賛された。1956年のスエズ危機では初めて国連軍を組織して、英仏のエジプト侵攻に対抗した。

本の題名の *A String Untouched* (『触れざる糸』) は次の俳句から取られている。

When the gods play  
they seek a string



untouched by men.

(意訳：人の未だ触れざる糸に神遊び)

それは見えないゴールから吹いてくる神の風で、その風は旅人に力を与える美である。彼はその美の力を早くから感じていた。それを彼は次の短歌のような詩で表現している。

Touched by the wind  
from my unknown goal  
the strings quiver  
while waiting.

(意訳：いまだ見ぬ果てより風ぞ触れにけるわが待つ糸のうち震えたり)

ハマーショルドは1960年に、冷戦のあおりを受けて不安定になっていた独立間もないコンゴに国連軍を送った。このときソビエトは国連事務総長の辞任をせまったが、彼はそれを拒否した。彼は1961年9月12日、調停のためにニューヨークからコンゴへ飛び立った。そして9月18日真夜中過ぎ、彼を乗せた飛行機がヌドラで墜落した。

死後ハマーショルドにノーベル平和賞が贈られた。彼は武人の魂を持った文人であった。江戸時代の武士の心を持った俳諧師を俳士と呼ぶが、彼こそは俳士と呼ぶにふさわしい。一句を剣よりも強しと信じ、剣樹をも怖れず飛び込んで行った。ハムレットのような疑問を神に問いかけて、その答えを見つけるために、勇敢に自らを世界平和のために捧げた。

Do you create? Do you destroy?  
These are the questions  
for your ordeal-by-fire.

(意訳：創造か破壊か神の探湯は<sup>くがたち</sup>)

大学に行こうとする社会、行こうとしない社会 東アジアの中での比較から

特別研究員 相澤 真一

日本は「教育熱心」な国であるとか、勤勉な国民性であると言われることがあります。少なくとも、「昔はそうだった」というイメージでしばしばメディアで語られることが多く、一度ならずとも耳にされたことがあると思います。ところが、東アジアの中で比較してみると、そうでもないかもしれないことを、社会調査データからご紹介いたします。今回は、大学に進学したいと考えていた進学希望者の数と実際に進学した人々の数の日本、韓国、台湾での比較を取り上げます。図1は、日本、韓国、台湾の大学進学率の推移です。

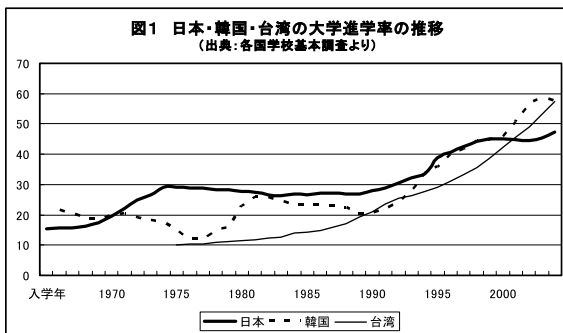
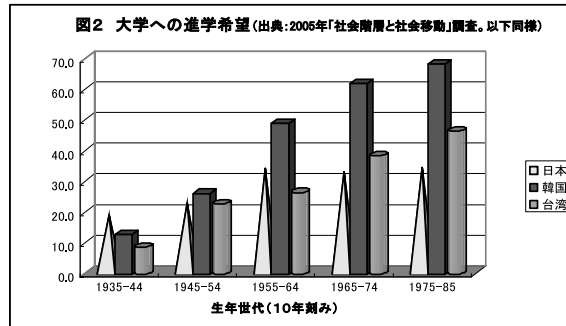


図1に見られるように、日本と韓国、台湾を比べると、韓国や台湾は、大学進学者が急速に増え続けています。近年では韓国、台湾の方が日本よりも高い進学率となっています。このような社会の変化の中で、人々が「大学に行きたい」と考える意識はどのように変化してきたのでしょうか。私がかかわってきた社会調査プロジェクトにて、日本、韓国、台湾のそれぞれの人々を対象に、「中学3年生のとき、あなたは将来どこまで進学したいと思っていましたか。」という質問を尋ねています。そこで、「大学」と答えた人々の割合をグラフに示しました。生まれた年によって、どのように変化するか注目しています。

この図からわかるように、日本は大学への進学希望が若い世代においても30%台で止まっているのに対して、韓国や台湾では上昇し続けています。そして、韓国や台湾における上昇の仕方は、図1の進



学率と比較しても急激です。つまり、韓国や台湾では、より上の学校に行きたいという考えを持つ人が、急速に増えてきたことがわかります。

しかし、これだけ急速に「行きたい」と思う人が増えても、実際に大学がなければ進学することはできません。そこで、「大学に行きたい」と希望したにもかかわらず、実際には行けなかった人の違いを同様に見てみましょう (図3)

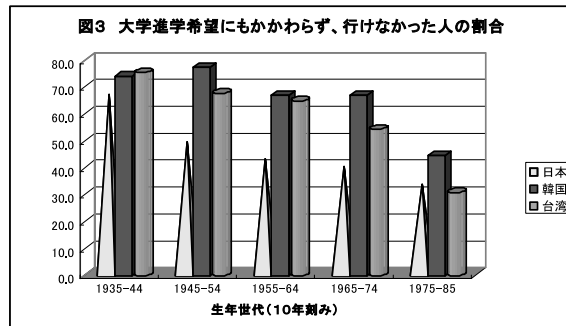


図3からわかるように、日本は大学進学率が上昇する1950年代半ば生まれ以降の世代では、大学進学を希望したにもかかわらず、大学に行けなかった人の割合は大きく減ります。ところが、韓国では、大学への進学を希望したにもかかわらず、大学に行けなかった人々が社会の中でかなり多いことがわかります。学校教育は人々をやる気にさせる「加熱」の効果とそれぞれの地位を納得させる「冷却」の効果があると考えられています。うまく「冷却」をさせないと、不満が社会に渦巻く可能性があります。

以上からわかるように、日本では大学を希望する



人自体が限られているのに対して、韓国や台湾では誰もが希望する一方で、行けない人が多数いるという状態が生じています。この両者を比較すると、日本の方が大学に行けない希望を満たせない人が少なく、よい社会のように見えます。しかしながら、日本には、違う形で問題点があると言えるかもしれません。次の図4を見てみてください。

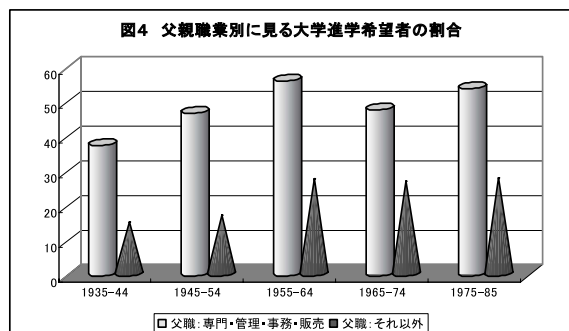
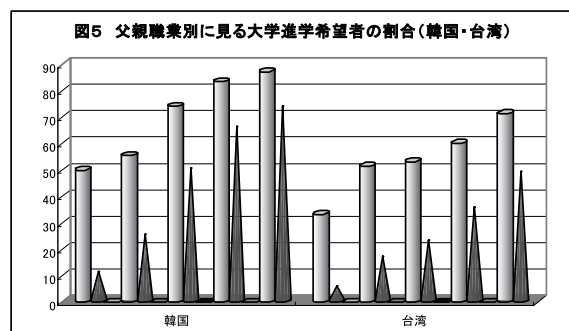


図4は、日本国内の中での差異として、調査対象者の父親の職業による違いに注目したものです。日本では、専門・管理・事務・販売職といったホワイトカラー職の父親を持つ人の大学進学を希望する人の割合が一貫して高く、それ以外の職業の父親を持つ人との間に大きく差がついています。

世界的に見て、親の職業や学歴が子どもの学歴に影響を与える影響はどこの国でもかなりの程度見られます。しかし、今回のデータから、本人の意思には大きな違いがあることがわかります。すなわち、日本では、「大学に進学するか否か」を考える時点で親の職業なり、学歴なりが影響します。そこで、「大学に行きたい」と考えるか、考えないかの差が出て、そのまま進学に格差に影響します。

一方、同様の割合を韓国、台湾で示してみると、図5のようになります。



韓国、台湾共に、大学進学希望者は、若い世代になるほど増えています。かつその進学希望に親の職業が与える影響は小さくなっています。ただし、みんな大学に行こうと考えるにもかかわらず、韓国や台湾では、結果として大学に行ける人と行けない人とが生じてきます。そして、この進学に格差には、親の職業なり、学歴なりが影響しているわけです。以上より、日本は「教育熱心」と言われてきたけれども、韓国や台湾と比較すると、「みんなが大学に行こうとはしない」社会であると言えます。なぜこのようなことが起きるのでしょうか。「日本の大学は学費が高いから」行こうとしないと日本だけで見ると、考えてしまいがちです。しかしながら、例えば、韓国も高等教育機関は私立が多く、家計に負担がかかる点は日本と同様です。

現在、日本では、大学の全入時代と言われていますが、現在の進学率の状況下で、定員と進学希望者が同じになったり、高卒者全員が大学に行くことと仮定すると、決して「全入」状態になった訳ではありません。韓国や台湾のように進学率が上昇したとするならば、日本が、韓国や台湾のように大学不足に陥ったり、もっと苛烈な進学競争に陥ったりした可能性もあるわけです。

なぜ、そうならなかったのか。そして、現在の日本国内の地域や階層、性別による教育熱や進学行動の格差がいかなる形で存在するかを、データを共有するアジア太平洋地域との比較から、さらに注目していきたいと考えています。

【付記】今回の記事では、2005年「社会階層と社会移動」調査のデータを用いました。分析に当たっては、2005年SSM調査研究会より、データの使用許可をいただきました。また、本記事の分析を更に深めたものを共同プロジェクト「アジア太平洋地域の社会的不平等の調査研究」の活動の一環として、2008年11月に東北大学で行われた第81回日本社会学会大会にて“Relationship between Educational Aspiration and Educational Attainment in Japan, Korea, Taiwan”として、発表させていただきました。

客員研究員によるCAPS拡大研究会

## Why Japan?

モハメド5世大学教授 モハメド・アアフィーフ氏

Colleagues, friends and students repeatedly ask me why I have chosen Japan as a field of study. I would like to share with the readers an extended answer which in reality relates to my own story with Japan. I was trained in a Moroccan university that focuses mainly on local and regional history with no real interest in the Far East or distant regions. Japan in particular was presented to us as an exotic country and an enigmatic nation which succeeded in the nineteenth century and achieved a rapid transition to become a powerful and developed state in an unprecedented manner, while the Arabs and other nations failed. The foremost answer that was presented in the few academic works then available to us explained the success by the cleverness of the Japanese and their ability of imitation. In the past, they profited from Chinese civilization and then did the same with Western civilization during Meiji restorations. Thus, Japan completely owed its progress and achievements to the West. This justification never satisfied my curiosity; consequently the question was still pending in my mind until I discovered Japanese History.

In the early 1990's I was fortunate to be awarded a Japan Foundation fellowship and hosted by the National Museum of Ethnology at Osaka where I was in daily contact with talented Japanese scholars and profited from a magnificent library for 6 months. There was my initiation to Japanese history and culture which inaugurated my shift toward Japanese studies. From the outset, I was determined not limit my research to the Meiji Restoration but to broaden it to a more comprehensive knowledge of Japan's historical and cultural development. My interest covered nearly the whole history of Japan from the Jomon era to the contemporary epoch and was not limited to the history per-se.; progressively the enigma of Japan began to elucidate and I started amassing parts of the answer to the initial question "Why did the Japanese succeed?"

The thesis that I adapted in my work is based upon the hypothesis that the Japanese went through a real period of transition during Tokugawa era. The long standing period of peace and order that was established by the shogun enabled the Japanese to achieve progress in many social, cultural and economic sectors. It is sufficient to mention the high rate of literacy which reached almost 40% among men before the Meiji restorations; the population growth; the urbanization; the domestic commerce; the network of roads... In addition, the achievements in the cultural domain were astonishing. The printing and industry of books attained a level surpassing its counterparts in Europe; more than 600 titles appeared each year. Also, no one could ignore the accomplishments in the Japanese theater and painting. All the facts prove that Japan did not owe all its progress to the sole impact of Western civilization.

The outcome of my research was beneficial first to my university where I initiated a course on Japanese history and culture and another on religions of the East. In addition, I encouraged my students to learn the Japanese language. Second, my research translated into a book about the origins of the modernization of Japan written in Arabic (note that the language is very important, for few academic works have been done in the Arab World about Japan). Third, my work contributed to the build up of Japanese studies in the Arab World where they were still at their beginnings.

Finally, I would like to express gratitude and gratefulness to the Center for Asian and Pacific Studies and its director Prof. Yoichi Kamejima. I was honored by their kindly invitation that provided me with the opportunity to resume relations and cooperation with Japanese scholars as well as profit from the academic and lovely natural surroundings of Seikei University.

## アアフィーフ教授研究会報告

文学部教授 堀内 正樹

アジア太平洋研究センターがモロッコから招聘したモハメド・アアフィーフ教授(モハメド5世大学)を囲む拡大研究会が、10月31日の夕刻、センター会議室で開催された。教授は日本の歴史を研究する歴史人類学者であり、アラブ世界初となるアラビア語によるオリジナルな日本通史の出版を間近に控えている。今回は、日本の前近代の統治システムを母国モロッコの前近代の統治システムと比較しようという斬新な目的を持って来日した。研究会での発表テーマも「モロッコのマフザンと江戸幕府 前近代の国家省察」というものであった。ちなみにマフザンとはモロッコの王朝を指す伝統的な呼称であり、「貯蔵庫」という原義を持つ。

日本の歴史をアラブ世界の歴史と比較する試みはこれまでもなかったわけではなく、たとえばカイロ大学の故ラウーフ・アッパース教授やレバノン大学のマスウード・ダーヒル教授がそれぞれ興味深い比較研究を行っている。だが日本のアラブ史研究者が同様の比較をしたという話は聞かない。実証主義に名を借りた日本のアカデミズムの「オリエンタリズム」的性格を反映しているのかもしれない。そして今回のような対象のあいだに直接的な因果関係やつながりのない比較に対しては、往々にして「思いつき」だとか「奇をてらったもの」とかいった批判を浴びせる。しかしまったく縁のないものを比較して新たな着想を得るという方法は、人類学が得意としてきた、というよりもそれなしには人類学が成立しない不可欠な基盤である。アアフィーフ教授が歴史学ではなく歴史「人類学」を標榜する所以である。

では教授が得た着想とは何か。研究会の発表を振り返ってみよう。縁のない対象を比較するときは、相違点よりもむしろ共通点に注目するのが有益である。日本とモロッコの場合、両者とも古代に発生した国家体制(日本は5世紀、モロッコは8世紀)が、その後の権力の交代にもかかわらず、連続性を保ちながら今日まで存続している。また両者とも大文明(中国文明圏、イスラム文明圏)の縁辺に位置してきた。そして違反すると統治者が権力の正当性を失うような原則(日本は天皇制、モロッコはイスラム法)を一貫して有してきた。さらに、両者とも同時



拡大研究会にて発表中のアアフィーフ教授

期(16～17世紀)に戦国時代の混乱を経験し、その過程で統治権の正当性を獲得するための外征(秀吉の朝鮮出兵、サアド朝スルタン、マンスールの西アフリカ遠征)が行われ、その後成立した統治体制(徳川の江戸幕府、アラウィー朝のマフザン)が19世紀まで安定した「長期平和」を維持した。そして幕府とマフザンは、ともに統治者の聖別(日光の東照宮、メクネスのムーレイ・イスマーイル廟)を行って宗教的正当性をアピールするとともに、血筋の正統性(徳川は天皇家に、アラウィーは預言者ムハンマドに、それぞれつながる系譜)を主張した。さらに、両者とも自らの軍力は最小限に抑え、地方勢力(幕府は大名、マフザンは部族のリーダー)の力を利用した統治体制を作り上げた。ただし体制維持方法としては、幕府は地方勢力を移動させて消耗を図る参勤交代という集権的制度を、一方マフザンは徴税のためスルタン自ら地方を移動して歩くことによって地方勢力の消耗を図るハルカ(巡幸)という対照的な制度を考案した。

教授の発表は、時間切れのため残念ながらここまでで終了した。これだけでも十分に刺激的な示唆であったが、教授の得た着想は、こうした数々の類似性を結ぶ内的な論理であり、言い換えれば両者の構造的連続性であろうことが、発表後の質疑応答からうかがえた。遠く離れた神話群に構造的連続性を見いだしたレヴィ＝ストロースを彷彿させる壮大なパラダイムを予感させる発表であった。

## 研究活動報告 (9月27日～11月15日)

9月27日(土)社会的不平等の調査研究プロジェクト  
研究会開催 14:00 - 18:30

場 所 : アジア太平洋研究センター会議室  
報告者 : 山形大学地域教育文化学部准教授  
金井雅之

テーマ : 温泉地における社会資本の役割  
「温泉地域の現状と取組みに関する学術  
調査」より

報告者 : 成蹊大学文学部専任講師 小林 盾  
テーマ : 社会階層と職場のフリーライダー問題  
出席者 : 10名

中国ドキュメンタリー上映会

10月28日(火)9:30 - 12:00

上映作品 : 「四海我家」

会 場 : 4号館101教室 出席者 : 8名

10月29日(水)15:30 - 18:00

上映作品 : 「私の紅衛兵時代」

会 場 : 3号館102教室 出席者 : 29名

10月30日(木)15:30 - 18:00

上映作品 : 「四海我家」

会 場 : 5号館102教室 出席者 : 32名

「中国、沖縄ドキュメンタリー/アートの可能性」講演会

10月31日(金)13:30 - 18:00

中国インディペンデント・ドキュメンタリー作家  
呉文光氏

批評家 仲里 効氏

ディスカッション司会 : 池上善彦氏

(『現代思想』編集長)

出席者 : 187名

10月31日(金)アジア太平洋研究センター客員  
研究員による拡大研究会開催 17:00 - 19:30

場 所 : アジア太平洋研究センター会議室

講 師 : モハメド5世大学教授・モハメド・ア  
アフィーフ

演 題 : 「モロッコのマフザンと江戸幕府  
前近代の国家省察」

出席者 : 6名

10月31日(金)社会的不平等プロジェクト海外出張  
(11月6日帰国)

出張者 : アジア太平洋研究センター・特別研究員  
相澤 真一

調査地 : オックスフォード(英国)他

目 的 : プロジェクト中間成果の研究発表と現  
地研究者との会合出席

11月14日(金)ロマン主義研究プロジェクト研  
究会開催 17:00 - 19:00

場 所 : アジア太平洋研究センター会議室

報告者 : アジア太平洋研究センター特別研究員  
重野 純子

テーマ : 婦人雑誌『Sibylle』に見る東ドイツ

出席者 : 5名

11月15日(土)社会的不平等の調査研究プロジェ  
クト研究会

開催 14:00 - 18:30

場 所 : アジア太平洋研究センター会議室

報告者 : 立命館大学産業社会学部准教授  
筒井 淳也

テーマ : グローバル化が排外主義的態度に与え  
る影響の国際比較

報告者 : センター特別研究員 相澤真一  
洛星中学・高校教諭 児玉英靖

テーマ : 戦後日本の教育拡大の地域的布置

出席者 : 15名

11月15日(土)社会的不平等の調査研究プロジェ  
クト国内出張(16日まで)

出張者 : センター特別研究員 相澤真一

調査地 : 大阪

目 的 : 大阪大学で行われた社会階層と社会移  
動調査研究会の会合に出席及び研究報  
告

紙面の都合により、11月16日～12月15日の研  
究活動記録はニューズレター102号(4月15日  
発行予定)に掲載します。

## センター招聘客員研究員

10月15日(水)モハメド5世大学(モロッコ王  
国)教授・Mohamed Aafif(モハメド・アア  
フィーフ)が「日本の近代化の起源」に関する研  
究のため来日(11月14日まで滞在)

### CAPS Newsletter No.101

2009年1月15日発行

編集発行 : 成蹊大学アジア太平洋研究センター

〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549(ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail : [caps@jim.seikei.ac.jp](mailto:caps@jim.seikei.ac.jp)

Web : <http://www.seikei.ac.jp/university/caps/>